子は親の力ガミ <3>

ママ友社交界

育児仲間で情報交換

つながり薄い社会背景に

消費観 第4部

20代前半で結婚。初めての新潟市暮らし。出産。夫との3人家族。同世代の母親は近所に皆無…。「ママ友ができてから、育児の不安が減った」。10カ月の娘をあやす主婦＝新潟市中央区＝(25)にはもう、心細かったころの面影はない。

相談できる友人を求めて、母親同士が交流する子育て支援組織「トキっ子くらぶ」に登録した。インターネットの掲示板を通して先輩ママの経験談を聞き、励まされた。最近は「公園デビュー」感覚で鳥屋野体育館に出掛け、同い年の子を持つママと会話を楽しむ。

「母親という肩書があれば、いろいろな人とつながれる。ママ友は育児書より心強い存在です」

◆

トキっ子くらぶは長岡市を拠点に活動し、県内全域に約1万7700世帯の会員がいる。会員特典を受けられる約500のサポート店と提携、子育て世帯の家計を助けるほか、チャイルドシートの選び方、料理レシピといった情報交換の場を、ネット上で提供している。気の合う親同士が直接集まるオフ会も盛んだ。

代表の今井進太郎さん(30)＝同市＝はマーケティング会社の社長。「子育て中という共通項があるから、ママ友は会話が弾む。母親同士の情報交換を重視する傾向が強く、その口コミを利用して商品を売りたいと考える企業も増えている」と話す。

子育ての一点でつながり、価値観や生活水準が異なるママ友付き合いには、金と手間もかかる。ネット上で妊娠、出産、育児サイトを運営するデジタルプティック社(東京)の2008年調査では子どもの誕生日に「特に親しいママ友には何らかのお祝いをする」母親が9割に達した。贈り物をするとの意見も多かった。

平均的なママ友像からは、子どもが幼稚園にいる時間帯、少しおしゃれしてみんなでランチを食べ、お茶を飲む光景が浮かび上がる。「性格が合わない人とは上手に距離を置く。気まずくなって仲間外れになるのは困るから、不満は口に出しません」。2児の母で、ママ友同士の昼食会に積極的な主婦(35)＝新潟市江南区＝は大人の付き合いを強調した。

◆

少子化で地域に母親仲間が少なくなった。母親たちは子育てサークル、ネット上でつながりを求め、さすらう。そんな状況に対し、子育て応援施設ドリームハウス＝同市西区＝代表の新保まり子さん(38)は「社会が寛容さを失ったことも一因」と指摘する。

「子どもが店で駄々をこねると〝しつけがなってない〟と責められる。地域で温かく見守ろうという意識が薄れ、母親が悩みや不安を吐き出す場所がなくなった」というのだ。

育児情報、グッズがあふれる一方で、母親たちは金で買えないつながりを求める。親密な関係を連想させる「ママ友」からは、地域で孤立しがちな今の母親の姿が透けて見える。

お金では買えないつながりを求めて、育児サークルや子育て支援施設にママ友が集う。数少ない情報交換の場だ